

## 34 済生学舎の顕微鏡科実地演習——特に

原玄一郎のペスト菌標本について——

唐 沢 信 安

済生学舎では、明治二十四年にドイツ・ライツ社製最新の顕微鏡五十台を購入し、「顕微鏡科実地演習」及び「外科実地演習」なる講習会を設けた。各々三ヶ月で計六月・年四回募集され約百名が毎回参加した。

その為に、済生学舎の教育内容も、明治二十八年から三十年頃にかけて、最も充実した時期を迎えていた。

今回は、元関西医科大学公衆衛生学教授の原一郎先生より祖父「原玄一郎医師」の遺品である「顕微鏡科実習標本八十六枚の入った標本箱」を母校に寄贈されたものを調査研究したので報告する。

玄一郎医師は、岡山県上房郡高梁町<sup>たかはし</sup>に明治七年七月八日に生を享けた。明治二十年に岡山県立薬学校に入学し、同二十三年に卒業した。更に明治二十四年に岡山第三高

等中学校医学部に進学するが、父の死去等で在学一年で退学している。その後再び志を立てて上京し、東京医学専門学校・済生学舎に明治二十六年に入学し、明治二十九年十月に「顕微鏡科実地演習」に参加し、三ヶ月の実習を受けている。第二十二回の実施参加生百二名中、優等生として長谷川泰及び教職員の前で答辞を原玄一郎は述べている。(済生学医事新報四十九号に掲載)

その時の顕微鏡科の実地演習で作製された病理的・細菌学的標本八十六枚の納められた標本箱が、今回寄贈された遺品である。標本箱の中には、「マラリヤ脳片」「扁平上皮癌」「色素性肉腫」「腎臓結核」「出血性肺炎」等のプレパラートの外に、十枚の「ペスト」患者の脾臓・心臓・肝臓・リンパ腫等の病理的・細菌学的標本が含まれていることに着目した。

ペストは昔から「黒死病」と称して恐れられて来た疾患で、高熱を発し、数日で生命を失う程の激症の状態に陥る病気で、病型を「肺ペスト」と「腺ペスト」に分類されている。ヨーロッパでは、十四世紀から十七世紀に至る約三百年間続き、一三四七年頃当時の人口一億余人

の中、二千五百万人がペストで死亡している。即ちその四分の一がペストの流行で死亡したと言われる。然しその原因の解明はなされていなかった。

明治二十七年に至り、香港でペストが大流行した際に、北里柴三郎と青山胤通等が現地に派遣され、北里と、パストール研究所のエルザンが、ペスト患者を調査中に、各自別々に、ペスト菌を患者の屍体及び血液から発見した。又、ペストはネヅミのノミが菌の媒介をしていることが判明した。

我が国で、最初にペスト菌が確認されたのは、それから二年後の明治二十九年四月一日のことであった。

アメリカ郵船「ゲーリック号」が横浜港に入港した際に、中国人乗船客の一青年がペストにて発熱し、死亡した。屍体は石灰をまいて墓地に埋葬されたが、その報告を受けた北里研究所部長高木友枝が、墓を発掘し、屍体の血液を横浜十全病院に持ち帰り、顕微鏡下でメチレンブルーに染色されたペスト桿菌を確認した。これが我国に侵入したペスト患者の最初の菌の検査確定の報告である。

同じ年の、明治二十九年十月には、早くも済生学舎の顕微鏡科実地演習に、別のペスト患者の屍体を用いて、実習に当らせていたことが、原玄一郎の標本箱のプレパラートで判明した。

約百年を経て、筆者が母校の公衆衛生学教授南正康先生の指導で、右の標本を六百倍に拡大して、ペスト桿菌を確認出来たので、今回の発表で供覧する。

明治二十九年に、済生学舎でペスト菌の標本を指導した教師は東京帝国大学の衛生学教室の助教授であった「坪井次郎」と、後日衛生学二代目教授となる「横手千代之助」助手であった。又病理学的標本の指導は、済生学舎専任講師の「山田良叔」と、帝大病理教室の「竹崎利薫」であった。

(日本医科大学)